

坂本城

坂本城を考
える会会報

発行責任者
藤本 一也
大津市雄琴
2丁目

坂本城の石垣 再出現

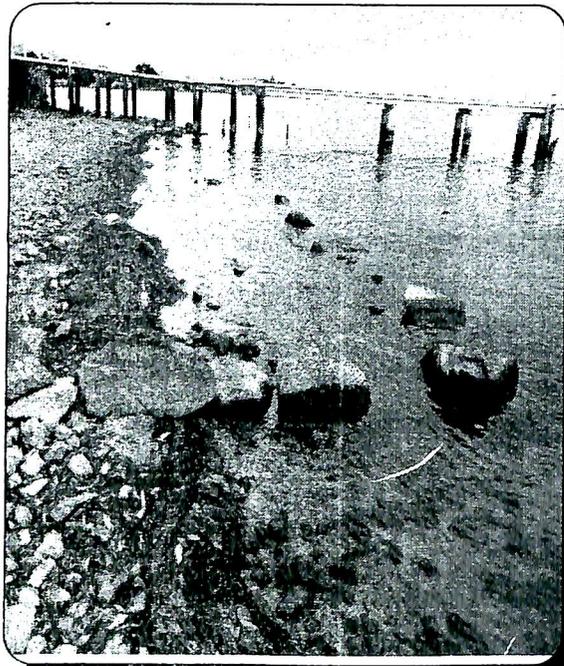
ガイドも好評で大忙し

琵琶湖渇水
コロナ禍でも
人が来る

残念！十六回
総会中止に

令和四年度の総会及び記念講演会は、新型コロナウイルス感染症予防のため、三年連続で中止することになりました。昨年の事業計画もほとんど実施できず残念ですが、今年の後半は、少しでも実施できればと考えています。

令和三年十一月は琵琶湖



の異常渇水のため、坂本城の石垣が出現しました。これは会が発足してから初めてのことであり、実際の石垣を見るのができて、大変喜んでいきます。

見学者が殺到 大混乱

平成六年九月渇水時の半分からNHKや朝日・毎日放送の取材放映、新聞各社の取材報道があり、「麒麟がくる」の影響もあり、多くの人の関心が

坂本城御城印札 大人気！

坂本観光協会が実施した坂本の御朱印巡り行事では、神社やお寺の御朱印を6枚集めると、当会の作成した御城印札が贈呈され、坂本を訪れた人に好評であった。



ガイドの説明 内容 恒岡善博

高まり、県内外から見学者が殺到しました。公園駐車が満杯で利用できず、道路渋滞が起こり大混乱しました。そのため駐車場閉鎖の対策がとられました。私たちの公園でのガイドも大変な状況となりましたが、実際に石垣を目の当たりにして説明することができ、非常にうれしいことでした。またいつの日にか、石垣を見ることができるようか。

私たち坂本城を考える会のボランティアガイドメンバーは、平成二五年から土日、休日に坂本城址公園に全国から訪れる観光客にガイドを行ってきました。観光客は坂本城の遺構を期待して訪ねてきますが、石垣も水に隠れて見えず、説明が中心になっています。まず、坂本城の縄張りです。坂本城は伝承により、この辺りに城があったという事は確かであり、



中国陶器 瓦等の遺物が出土しました。これらの

旧道と東南寺川が交差するところに、坂本城跡の碑が大正四年に建てられています。しかし長い間、城の詳細はほとんどわからず、昭和五四年にこの土地の所有者の会社が、施設を建築するので、発掘調査が行われました。その結果、礎石建物跡が三棟、掘立柱建物跡が一棟井戸等の遺構が検出され、さらに国産陶器、

ボランティアガイドを紹介します

- 青木 八郎 猪飼 徹 石丸 学
- 北木 茂 笹井 貫二 辻 榮子
- 津田 睦美 恒岡 善博・成宮 律子
- 東山 政司・北海 浩司・松山 武志
- 美内 志郎・森 茂樹・山岡 和則
- 山本 正史

当時の坂本

次に光秀が坂本城を築城する当時の坂本の状況についてです。下阪本は琵琶湖水運により東国、北国の物資が荷揚げされ、

ことから、この場所に光秀が重臣を集め政治を行う御殿が、また宣教師ルイスフロイスや京都の公家の記録による大天守、小天守を持つ本丸があったとされています。二の丸は陣屋、武器庫等の軍事施設、米蔵、薪蔵等の倉庫群があり、三の丸は重臣の屋敷(待屋敷)があったとされ、琵琶湖水を引き入れた外堀、中堀、内堀の三重の堀に守られた水城であったとされています。

滋賀越え(山中古道)を通り京の都に運ぶための港町として大いに栄えていました。一方上坂本は延暦寺の門前町として栄え、両方合わせて二万人を超える人口を誇り、近畿では京都、堺に次ぐ三番目の都市でした。ところが1570年(元龜元年)志賀の陣が勃発し坂本一帯が戦場になりました。信長軍は、三好勢や石山本願寺を攻めに摂津(大阪)に出陣している隙をついて浅井・朝倉軍が三万の兵で京を目指して湖西を南下し、坂本に侵攻してきました。その時、宇佐山城主であった森可成(森蘭丸の父)は、近江を守っていた兵約三千人を集めて応戦しました。さらに比叡山の僧兵も浅井・朝倉軍についたため、森軍は千人といわれる戦死者を出す敗戦となり、森可成も比叡山あたりで討ち死にしました。摂津の陣を撤収して急ぎよ戻ってきた信長軍約三万人は、比叡山を取り囲むように平地に陣取り、浅井・朝

坂本城築城

倉軍は壺笠山より北の比叡山一帯に立てこもりました。約三か月間小競り合いがありながら、にらみ合いが続き、將軍足利義昭の仲介で和睦が成立して両軍は撤退しました。この時延暦寺は、浅井・朝倉軍に味方したため信長の怒りを買って、翌年の比叡山焼き打ちにつながります。

比叡山焼き討ち後、1572年(元龜3年)、光秀は信長に滋賀郡の支配(5万石の領地)を命じられ坂本城を着工します。坂本は交通の要所であり、琵琶湖交易の確保と延暦寺の監視のための築城と考えられています。光秀は坂本城を本拠にして信長の命を受け、滋賀郡の支配やいくつかの信長の戦に動員されるなど、忙しく働きました。さらに1575年に丹波の平定を命じられました。1579年ようやく丹波(29万石)を

本能寺の変

平定し、領主として善政を行ったといわれています。しかし1582年(天正十年)理由にはいろいろな説がありますが、本能寺で信長を打ちました。(本能寺の変)ところが山崎の合戦で秀吉に敗れ、その夜、勝竜寺城を脱出し坂本城を目指して山科の小栗栖まで来たところで落ち武者狩りに会い、命を落としました。坂本城を守っていた明智左馬之助秀満は秀吉軍の攻撃を受け、坂本城は炎上。落城し、光秀の坂本城は約十年で役目をおえました。

大津城へ移築

その後、丹羽長秀により再建されましたが、1586年浅野長吉により大津城に移転されました。秀吉が大津城を築城し、政治の中心が大阪、伏見に移り、大津の重要性が高まったためです。この時、城の部材や石垣はほとんど大津城に運

ばれたと考えられます。最後に坂本城の遺構として聖衆来迎寺の表門とともに、平成6年の琵琶湖大洪水の時に発見された石垣があります。いつもは水に隠れているため見る事ができませんので、当時の写真を使って説明してきました。ところが令和3年にも濁水がおき、今回現れた石垣は城の南東の角に当たると考えられますので、新たに撮った写真を使い、説明をしています。概ね観光客から評価していただき、手ごたえを感じています。

光秀公と佐目の人々

近江・美濃・伊勢の三国との境界近い、鈴鹿山脈の麓の多賀町佐目の十兵衛屋敷を、「坂本城を考える会」の研修で訪れた。明智光秀公は、青年時代は十兵衛と呼ばれていた。

美濃の齋藤道三の岐阜城落城後、彼は叔父と共に隣国の土地勘のある多賀に潜伏していたと言われている。屋敷跡は多賀大社近くであり、佐目在住の子孫の人々に、古文書と口伝により、整備保存され、公開されていて、使命感のような光秀支持が漂っていた。多賀大社近くの「近江戦国の山道」は、鈴鹿山脈十七の峠を含み、伊勢への古道と重なっていた。佐目の人々は、古道の入り口に住み、関所の番人となり、伊勢参りの旅人や多賀を守る役割をしていた。

明智家は彼らの目付役人として、秘かに暮らしていた。多賀の山奥では、「砂鉄」が産出され、刀剣を製作する金属加工集団が住み、人々は四百度から千度の高温での製鉄作業に関わっていた。その炉は、身体の右側に置かれたので、高温で右目がさらされたため、損傷がひ

どく、左目に頼った生活を余儀なくされた集団ができていた。これらの人々は「左目の人々」として生活し、時代の変遷で「佐目」となり、現在に繋がっている。四百五十年後の現在も、光秀公と関連のある井戸、間道入り口、優雅な石組みの庭園のある十兵衛屋敷跡等を大切に守り、誇り高い住民の意識が伝わってきた。光秀公の潜伏期において、銃や漢方等の知識、深い文化的素養も、多賀での目付役であったとすれば、可能だったと推測できた。ガイドの女性は、この佐目近隣の者の多くは、大山崎の戦場へ迷わず駆け付けたと解説した。

彼なりの理想的な平穏な社会の到来を求めて、時代に翻弄されながらも挑戦的に生きた光秀公の迫力とその後ほぼ二百五十年間の大戦のない江戸時代の原点の

明智光秀 最新研究 東山政司

一部は、この多賀の佐目であると推測し、励まされる研修会であった。

明智光秀といえば、少し前まで天下人を裏切った謀反人というイメージを持つ人が多かったと思います。しかし近年、織田信長やその政権、家臣団、そして本能寺の変に関する研究が進み、さらに大河ドラマ「麒麟がくる」の放映をきっかけに、明智光秀が改めて評価されている。ここでは、近年発見された資料を中心に、著しく進展している明智光秀研究の一端を紹介いたします。

石谷家文書 (いしがいかもんじょ)

岡山市の林原美術館が所蔵している古文書で、2014年に公表された際には、大きな話題になりました。特に注目されるのが、織田信長と長宗我部氏の関係に關わる書状群です。土佐から起った長宗我部元親は周辺に勢力を広げる過程で、織田信長と通じた。その取次役となったのが明智光秀です。信長は畿内から東国・中国地方に支配をひろげ、また長宗我部元親は信長より「四国切取次第」の保証（朱印状を得たというが現存しない）を得て、土佐から阿波・伊予等に勢力を広げていきます。双方の勢力範囲が直接接しないうちは問題なかったのですが、阿波の三好氏が信長に下ってから、関係がこじれてきます。降伏してきた三好氏に所領を残そうとする信長と、「切取次第」の言葉をたてに、三好氏領への侵攻を続ける長宗我部氏。明智光秀はその間に立って、何とか戦争を回避しようとしています。「石谷家文書」には、衝突回避のため、光秀が長宗我部氏を

岐阜城と明智城址 バス研修ご参加を

と き 10月22日 (土)
出 発 JR比叡山坂本駅 8:00
 下阪本支所前 8:10
 JR大津駅バス停 8:40
帰 着 JR大津駅バス停 18:00
参加費 7,000円 (昼食付き)
申し込み 先着 25人

会 長 河村 益孝
 070-5507-7350
事務局 山本 正史
 090-1671-1236

**コロナの感染状況により中止
することもあります**

資料自体は以前から知られていましたが、2021年に明智光秀に関連する論文が発表され、改めて注目されています。特に注目を集めたのは、本能寺の変の際、本能寺の信長宿所への攻撃は家臣らの斎藤利三らに任せ、光秀自身は京の南、鳥羽に布陣した。という記述です。

ただ史料の性格上、全

針葉方

(しんやうほう)

熊本市内で発見され、2014年に発表された個人蔵「米田家文書」にある医術書です。ただ発表当初はその紙背に記されていた「幻の信長上洛作戦」の方

真摯に説得する書状が残されています。これが四国問題の概略で三好氏と関係が深い羽柴秀吉との派閥争いの意味も含めて、本能寺の変の一因と捉える研究者も多くいます。

この「針葉方」は足利義昭に仕えた米田貞能が1566年(永禄9年)に当地坂本で書写したものと伝わっていて、元の本の奥書に「この書は明智十兵衛尉が、近江国高島郡の田中城に籠城した際に医薬の秘伝をまとめたもの」と記されています。

乙夜之書物

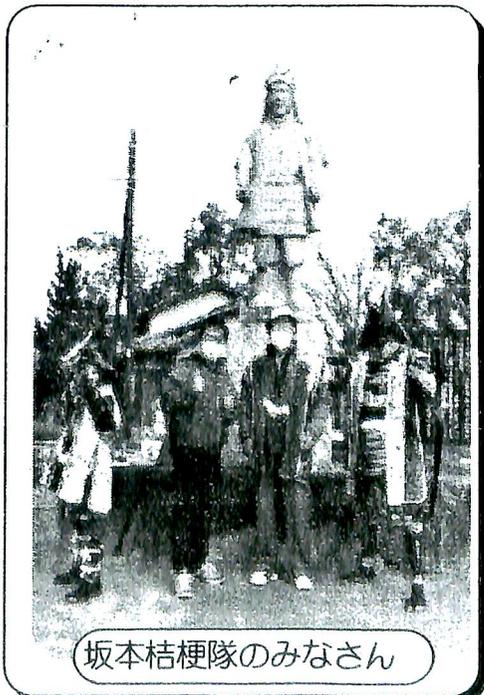
(いつやのかがきもの)

これにより、光秀には医学の知識があり、永禄9年より前に湖西で活躍したことが分かり、謎に包まれた光秀の前半生が少し見えてきました。

加賀前田家に仕えた兵学者関谷政春が見聞きした逸話を集めた江戸時代初期の書物です。後世に書かれたものであるため、信ぴよ性は低いですが、本能寺の変に参戦した武士からの聞き書きが記されている点で貴重です。

面的に信用できるものではないため、実際どうだったのかはわかりません。個人的には本能寺の攻撃自体に参戦していたかどうかともかくとして、信長を討つ、という重要な局面において、鳥羽のような遠い場所にとは考えにくいと思えます。

もう一つ、注目すべき記述があります。それは、従来同一人物といわれていた「明智弥平次秀満」と「明智左馬之助」を明確に別人として扱っている点です。湖水渡りの逸話で坂本城と関係の深い人物ですが、「乙夜」では、「秀満」は明智光秀の娘婿で知行一万五千石の重臣、「左馬之助」は知行五千石の「御モツ立」



坂本桔梗隊のみなさん

(幼少から取り立てられた者)として記されています。

どこに出没? 坂本桔梗隊

親子で甲冑を着て、おもてなし活動をしている北海浩司さんは、今までに西教寺や多賀町佐目などでおもてなし活動をしている。今回は坂本城址公園で、ボランティアガイドと一緒にになって出没し、坂本城や光秀公の良さを伝えました。今後もしろいろな場所に出没し、「坂本城・光秀」をアピールするそうです。乞うご期待。